1|ミルグラム監獄内尋問室

薄暗い尋問室の中。

さめざめと泣くムウの声が響いている。

椅子に座っているエスがイラつき貧乏ゆすりをしている。

ムウ 「……っ……ひっく……ひっく……」

エス 「はぁ……」

呆れた様子で見ながら、ため息をつくエス。

ムウ 「ぐす……っ……うう……」

エス 「おい、いつまで泣いている囚人番号4番ムウ。尋問が始められないだろう」

ムウ 「……尋問って何絶対ひどい目に合うんだ……やだ……」

エス 「そんなことはしない、と何度も言っているだろう。もう5分経っている、時間は有限なんだぞ」

ムウ 「ぐすっ、信じられるわけないもん……こんな変なところに連れてくる人が……変なことしないわけないもん」

頑として聞かないムウに頭を悩ますエス。

エス 「気持ちはわからんでもないが……話を聞くだけだ。お前の罪を判断するための参考にな」

ムウ 「……本当に話だけ？」

エス 「あぁ。それが僕の方針だ。暴力を用いての拷問や脅迫などはするつもりはない。僕なりにきちんとお前らのことを知りたいからな」

ムウ 「……」

エス 「……いいな」

エスの瞳を見て、ゆっくりと口を開くムウ。

ムウ 「……楠:夢羽。15歳。あと何を言えばいいの……」

エス 「ふむ。……少し気になっていたんだが、その顔だち、ハーフというやつか？」

ムウ 「うん……ダブル。ママがフランスの人。日本生まれ日本育ちだけどね……」

エス 「ふむ。その容姿だと、さぞ目立ったことだろうな」

ムウ 「うん……そうだね……おうちもお金持ら、やっかみとか、たくさん……」

エス 「ふぅん……そういうものか」

ナチュラルに自慢を混ぜるムウ。興味なさげなエス。

エス 「ミルグラムの生活はどうだ？」

ムウ 「……どうもこうもないよ。早く帰りたい」

エス 「ほう？なぜだ。お前たちにはそれなりに自由も与えている。嗜好品の類も最低限支給している。事実、お前からもミルクレープの申請があった」

ムウ 「そっ、それはそうなんだけどミルクレープは食べたけど……おうち、帰りたいよ……」

エス 「……ふむ」

ムウ 「絶対にパパとママが心配してるもん……ぐすっ……」

さみしげなムウ。再び涙ぐみはじめる。

ムウ 「だいたいなんなの、ここ。なんでムウがこんなとこに連れてこられなきゃいけないの……」

エス 「簡単な話だ。ヒトゴロシだからだろう」

涙まじりのムウを意に介さず続けるエス。

エス 「ミルグラムはヒトゴロシを集めてくる。そこは間違いないようだ」

ヒトゴロシの言葉に反応して前のめりになるムウ。

ムウ 「ヒトゴロシ、って……なんでそんなひどいこというの！ムウ悪くないもん！」

エス 「ふぅん……殺してない、とは言わないんだな」

ムウ 「そ、それは……」

エス 「それは？」

もじもじと言いよどむムウ。

ムウ 「……んん」

エス 「どうした？」

ムウ 「……殺したよ。でもあっちが悪いんだよ。殺さなきゃいけないくらい、ムウ辛かったんだもん」

下を向いたまま口をとがらせるムウ。

エス 「報復、ということか……」

ムウ 「たしかに殺したかもしれないけど、そうじゃなきゃ逃げられなかったんだし、ムにひどいことすほうが悪いもん……」

エス 「ふむ……続けろ」

ムウ 「殺しちゃ駄目って言うなら、ムウはずっとつらい思いをしとけばよかったってことなの？」

開き直るムウ。

エス 「ふむ。理由はどうあれ、お前は明確に殺意をもって人を 「殺しているな」

ムウ 「なに……それがどうしたの……？」

エス 「『うちへ帰して』と言っていたな。仮に……だが、ここを出られても、警察の世話になることになるだろう？」

エスのくちぶりに身体をこわばらせるムウ。

エウ 「……！」

エス 「そもそもムウが人を殺したことについて、警察は動いていないのか？」

ムウ 「知らないよ……やっちゃった後からしばらく記憶がハッキリしないもん。気付いたらここにいたし……」

エス 「そう、なのか……」

初めて知る事実に少し驚くエス。その様子に頬を膨らませるムウ。

ムウ 「自分たちが連れてきたくせに……」

エス 「ふむ……ミルグラムには10人の『ヒトゴロシ」が収監されている。どうもこれは日本の法律に照らした殺人犯や犯罪者に限った話ではないようだ。ミルグラム独自の広義のヒトゴロシのようだ。それは何人かに話を聞き、わかってきた」

ムウ 「そう……なの？」

エス 「ただ、ムウ。オマエは殺意も明確。シンプルだ。オマエたちがいうところの刑法119条殺人罪というものに当てはまるだろう」

ムウ 「知らないムウそんなの詳しくない……」

エス 「言っとくが僕も別に詳しくない。参考までに書庫にある資料で調べただけだ。••••••ここで重要なのはお前たちの法律に照らせばアウトだという事実だ」

バッサリ切り捨てるエスに不満げなムカ

ムウ 「しょ、少年法っていうのがあるんじゃないの……」

エス 「ある。だが、16歳以上であれば刑事裁判を受け、懲役だ:死刑こそ免れるようだがな。ムウが望むようなマトモな生活は送れないだろう」

ムウ 「ちょ、懲役……やだ、そんなの……」

エス 「やだといって聞いてくれるものか」

ムウ 「やだなの！！」

子供のように駄々をこねるムウ。それを見て少しおかしくなるエス。

エス 「くっくっくミルグラムは僕の方針で囚人たちに相当自由を与えているが、実際の刑務所はそうはいかないだろうな。もちろんミルクレープもなしだ」

ムウ 「やだ、やだよ……おかしいよ、ムウ悪くないのに懲役なんて……そんなのおかしい」

エス 「そうだな……じゃあ、こう考えてみろ。..ミルグラムは法律からオマエを守っていると」

思いがけない言葉にきょとんとするムウ。

ムウ 「ま、守ってる？ムウを？」

エス 「そうだ。ミルグラムは現状、あくまで現状だが、法律を善悪の基準としていない。最終的に僕がどう思うかでしかない」

頬を膨らませるムウ。

ムウ 「看守さんの言ってること難しくてわからない……もっとわかりやすく言ってほしいよ」

エス 「『私は悪くない』ずっと、オマエはそう言っているだろう……そのとおりだ。殺人それ自体はミルグラムでは罪ではない」

ムウ 「……そうだよね？悪くないよね？」

エス 「そうだ。最終的に僕もお前は悪くないと思うかもしれない。僕がムウのことを知り、ムウと同じ感覚であれば、オマエは赦されるだろう」

ムウ 「……看守さん……」

言葉尻だけで、エスを味方だと感じ安堵するムウ。

意地悪そうに笑むニス。

エス 「赦されたければ……そこに賭けるしかないんだよ。オマエは」

ムウ 「ど、どうすればいいの？どうすれば看守さんは赦してくれるの？ムウ、なんでもするよ？
あっ、痛いこととか恥ずかしいことはやだけど……あと、怖いのもやだ……」

エス 「お前な……」

ムウ 「だってそうでしょ？つまり看守さんに気に入られればいいんでしょ？ムウ言うこと聞く。何すればいいの？」

エス 「……さぁな。殊勝な態度だが、僕がどう考えるかは僕もわからない」

ムウ 「え……？」

エスの言葉に違和感を覚え、顔が険しくなるムウるエス。

エス 「ふふ。それこそ、オマエが美人だから赦す。美人だから赦さないもあり得るという話だ。それを決めるのがミルグラムだからな」

ムウ 「ちょ、ちょっと待って看守さん。……あの……」

エス 「なに、ちょっとしたジョークだ。僕次第ではそうなる可能性も……」

ムウ 「いや、そうじゃなくて……気になるんだけど……」

言いよどむムウ。その様子にようやく気づくエス。

エス 「……？どうした？言ってみろ」

ムウ 「看守さん。なんで全部他人事みたいなの？」

エス 「……え？」

ムウ 「どうなるかわからない……..って。自分の話なのに……なんでそんな他人事みたいなの……」

エス 「何を……言っている……」

ムウ 「え？だって、お、おかしいよ。看守さんの意思で決めるんでしょ。看守さんが今どう思ってるのか聞いてるのに……」

ムウの言葉を頭が理解するのを拒み、言葉が出ない。

息が吸い込めないエス。

ムウ 「ねぇ」

エス 「……」

ムウ 「看守さんの言う僕って……誰？」

エス 「……ッ……ぁ……」

ムウ 「看守さん……？」

様子のおかしいエスに気づき、心配そうなムウ。

椅子を倒し、床に手をつくエス。

エス 「……ッ……ァ……ハァ！ハァ！ハァ！」

ムウ 「看守さん！どうしたの！！看守さん！！」

エスに駆け寄り、背中をさするムウ。

ムウ 「ねぇ、看守さん！！！」

エス 「うるさい！！さわるな！！」

ムウ 「ひっ！」

その手を思いっきり振り払うエス。

感情を爆発させたエスに、悲鳴をあげるムウ。

何が起きたかわからず、目を丸くするが、状況がわ

かり、徐々に目から涙が溢れ出す。

エス 「ハァ……ハァ……」

ムウ 「ひ……ひ…………ひどいぃぃ……ムウ心配しただけなのにぃ……」

エス 「……」

ムウ 「ぐす……ぐす…………もうやだぁ……看守さん嫌いぃ～……」

突然どこからともなくドスッと机の上に乗っかってくるジャッカロープ。驚くムウ。

ムウ 「キャッ……ぐす……うさ、ジャッカロープ……どこから……？」

エス 「……ジャッカロープ……？」

ジャッカロープはエスに何かを話しかけている。ただその声はムウには聞こえない。そのため見てはいけないものを見るような表情のムウ。

エス 「あぁ……わかってる……わかってるよ……」

ムウ 「う、うさぎと喋ってる……？」

エス 「……言われるまでもない僕にもわからないが、もう大丈夫だ。行ってくれ。僕の仕事だから……ああもう……うるさいな。保護者じゃないんだから、小言はもういい……行け！」

満足気にジャッカロープが去っていく。見送るムウ。

ムウ 「……ジャッカロープ、行っちゃった……」

エス 「……はぁ、すまない、取り乱した」

ムウ 「……おかしくなっちゃったの……？看守さん……」

エス 「いや、ジャッカロープの声は僕にしか聞こえないんだ」

ムウ 「あぁ……完全におかしくなっちゃってるんだ……」

エス 「違う。憐れみの目で見るな」

憐れみの目で見ていたムウ。ぷっと吹き出す。

ムウ 「ぷっ……」

エス 「あん？」

ムウ 「ふっ……うふふふ、変なの……」

エス 「……なんだ。さっきまで泣いていたくせに」

ムウ 「なんかもう……ワケわからないことが続いて、一周回っちゃった……難しいこと言ってたと思ったら、うさぎと話しだすし……ふふふ」

にやけるのが止まらないムウ。少し馬鹿にされているようで不服なエス。

エス 「……」

ムウ 「なんだっけ……何を聞こうとしてたかも忘れちゃったいいや、怖くなくなったし……」

エス 「はぁ、それはなによりだ」

すべきことがわかり、声に明るさが出てくるムウ。

ムウ 「つまり、看守さん好みの人になればいいんだよね。そしたら赦してもらえるんだ......」

エス 「......そういうことになるか？」

ムウ 「そうだよ。看守さんも人間だし。ムウがんばる。看守さんの好みを知るよ......うさぎと話す可哀想な人だけど。ぶふつ......]

エス 「もうそれでいい。お前との話はテンポが悪くてかなわん」

ムウ 「ムウ、絶対帰るから......パパとママの元へ帰るんだもん......赦してもらえればきっと帰れるよね？」

エス 「......知らないけどな......」

ムウの希望的観測に対して、聞こえないように呟くエス。

聞こえないムウは笑顔を見せ始める。

ムウ 「うん、やっぱり......考えてみれば全然悪くないムウを捕まえようとする駄目な警察よりも、ミルグラムの方がいいかも」

エス 「はぁ......まぁ、それはそれでいいか......大人しく尋問を受けてくれるなら......」

突如部屋にある時計から鐘の音がなり、部屋の構造が変化していく。

ムウ 「きゃあ......何？壁が動いてる......何が起きてるの？」

エス 「はぁ......もう時間か…......あまり話せた気がしないが、まぁいい。お前の心の中、覗かせてもらう」

ムウ 「......歌にするってやつい、痛くない？」

エス 「多分な」

ムウ 「......痛いならやだ。やらない......」

エス 「駄目に決まっているだろう。痛くないから安心しろ！」

ムウ 「じゃあやってもいいよ......」

エス 「はぁ......そもそも選べるものじゃない」

ムウ 「看守さん、せっかくやるんだから、ちゃんと見ててね。ムウ、絶対悪くないか......仕方ないって思うはずだか......」

エス 「あぁ、見せてもらうとするよ」

妖しく笑うムウ。

ムウ 「......変な判断したら、赦さないからね」

エス 「……っ」

その雰囲気に一瞬気圧され、息を飲むエス。

エス 「僕を、馬鹿にするなよ」

ムウの肩に手を載せるエス。

エス 「囚人番号4番、ムウ。さぁ。お前の罪を歌え」